

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Φ・M・ドストエフスキーにおける「手記」形式作品の自己言及性について:『未成年』、『作家の日記』 試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sakanaka, Norio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1848

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文内容の要旨

氏名 坂中紀夫

Ф・М・ドストエフスキーには「手記物」とでも呼びうる作品群がある。本論は其中でも作家の晩年の二つの作品、長編小説『未成年』（1875）と社会評論的作品『作家の日記』（1873-1881）について主に検討していく。

『未成年』と『作家の日記』は時期的に隣り合っているため、並べて論じられる場合にも、これまでは伝記的な文脈から検討されることが多かった。しかしながら、この二つの手記形式の作品には、伝記的な文脈とは外れたところでも、幾つかの類似点を見ることができる。本論はそうした類似点についての分析を試みることで、ドストエフスキーにおける手記についての理解を明らかにすることを目的としている。この点を明らかにすることは、世界的な規模でもあまり例をみない『作家の日記』という特異な作品において、晩年のドストエフスキーが実際のところ何をしようとしていたのかを考えることにつながるだろう。またここには、この二作品がそれぞれ「自伝」と「日記」として設定されていることから、彼における「自己」の問題についても検討を試みている。自己言及的になされる「自伝」や「日記」は、通俗的には自分自身についての記述がなされるものとの理解があるからである。

本論は四章からなる。第一章では、ドストエフスキーの手記形式作品を検討するための前提として、そもそも手記とはいかなる文芸形式であるのかを整理する。ここで取り上げるのは、探偵小説である。「手記」形式を多用するこの文学ジャンルは、自己言及的な特徴を強く持っており、そのため『未成年』や『作家の日記』の検討にとっても適している。探偵小説の形式化の諸問題を追うことで、ここでは手記が成立するための条件が取り出されるだろう。

第二章では、『未成年』の構成が検討される。ここで議論の中心となるのは、作中で主人公が抱く「ロスチャイルドの理念」というものについてである。この理念は「ロスチャイルドのような金持ちになる」ことを目的とするもので、主人公は物語の中で一貫してこの目的に関連的な行動をとる。従って、この理念に関心を寄せて作品を考察することは、この作品の全体的な構成を把握することにつながるだろう。

第三章では、『未成年』と『作家の日記』の共通性を分析し、さらに前者から後者への発展性の指摘を試みる。ここでは、手記を書くことの意味を明らかにするとともに、両作品がその手記を人に読ませるという契機を含んでいることから、書くことの行為性の問題についても検討を試みている。

第四章では、『作家の日記』について述べられる。この作品は作者によって「日記」として設定されているが、その内容は短編小説や回想、文芸批評など様々なジャンルから構成されており、いかにも日記的ではない。ここでは、この作品の記述を追っていくことで、はたしてそれが「日記」足り得るかという問いに肯定の形で回答がなされる。

最後に、第二章から第四章で整理された事柄を、第一章で整理していた手記というものの条件と比較し、『未成年』と『作家の日記』の独自性について指摘する。